

氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける



人物紹介 characters



ダリオン・ガウス・オーグスタ

セスやレナードが属する
騎士団団長。

少し説教くさい部分もあるが、
明るくおおらかな性格で部下思い。



レナード・ヴァン・ウィンラム

伯爵家の次男坊で騎士。
元孤児のくせに

自分よりもいい家柄であり、
能力が高いセスに嫉妬している。



セス・ヴィラス・リステアード

王宮騎士団員で端正な顔立ち。

孤児ながらもその優秀さを認められ、

侯爵家の養子となる。

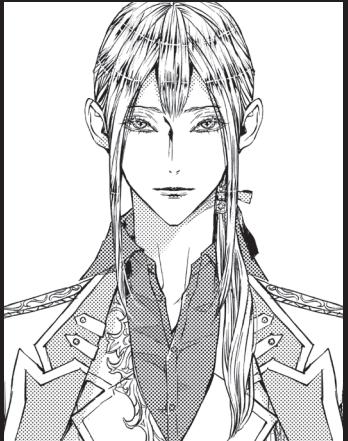
幼い頃、魔獣に襲われた際に

ノクトに助けられる。



エレーナ

アルナディア王国第三王女。
国では少し疎まれがちな存在だったが、
ハルジに一目惚れされて幸せに。



ハルジ

エルシャルオン王国の王太子。
ノクトをある理由から信頼している。
幼い頃からエレーナを愛し、婚約中。

ノクト・ロラ・シャルダン

数百年に一人現れるという、
膨大な魔力を持った氷の魔術師。
その魔力のせいで周囲から恐れられ、
他人との関わりも薄く、
孤独な日々を過ごす。

目

次

氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける

番外編 子ども扱いも悪くない セス視点

氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける

僕が魔力を持たないただの人間だったとしたら、今頃何をして暮らしていただろう。子どもの頃の夢は、騎士になること。

世間を知らなかつた僕は、努力すれば何にでもなれるという謎の自信があつた。だが、大人になればいやでもわかる。

この世には、努力だけでは叶えられない夢があるということが。



「やれやれ、今回は一段とでかいなあ……」

腰まで海水に浸かりながら高く掲げた両手の先に、極彩色の巨大な魚が浮かんでいる。体長は十メートルといったところか。

胴は丸く、大きな尻尾^{しりぽ}が薄衣^{うすぎぬ}のようゆらゆら揺れるさまは優雅ではあるが、ギヨロリとなかば

飛び出した大きな目はちょっと……いや、かなり不気味だ。

また、その魚型魔獸はただ浮いているわけではない。派手な鱗^{うろこ}に覆われた魔獸の体は、透明な立方体の何かに包み込まれている。

非難がましい目で僕を睨んでいる魚型の魔獸を閉じ込めているのは、キューブ状の巨大な氷塊^{ひょうかい}だ。これが僕の魔力——水属性の魔法でつくりあげた氷の檻^{おけ}である。

漁場を荒らし、人をも襲うというこの巨大な魚型魔獸に、港町の人々は酷く苦しめられていた。魔獸が人を捕食せども、こんなものが漁場をうろついていては仕事になるはずもない。

そういうわけで魔獸退治の命令が国王より下つたわけだが、只人^{ただひと}——魔力を持たない人間たちで構成された討伐隊では対処できなかつた。この魔獸があまりに大きすぎたせ이다。

そこで呼ばれたのがこの僕、水の魔術師ことノクト・ロラ・シャルダンというわけだ。掲げた両手に力を込め、拳を握る。

僕の動作とともに巨大な氷は鈍い音を立てて粉々に砕け散り、中に封じられていた魔獸は黒い煙となつて霧散^{むさん}した。

海面に立ち込めていた霧が晴れ、廻^{なまき}が戻る。あとに残つたのはずぶ濡れの僕だけだ。

ついさつきまで大時化^{だしけ}だった海が晴れ、まばゆい太陽が港町を照らしている。「あれが噂の『氷の魔術師』か……。凄まじいな、あんなでかい魔獸を一瞬で消し飛ばすとは」

「なんという禍々しさ。あいつが俺たちの敵に回つたら、一瞬でしまいだぞ……」

ざわ、ざわ……と背後でさざめく声が、僕の耳に忍び込んでくる。

僕はそれを聞こえないふりをして、海水を含んで頭に張りついているフードを上げ、濡れそぼつた黒髪を手櫛で後ろに流した。

一部の人間が『神の祝福』を受けて魔力に目覚めるように、獣や鳥、魚や昆虫などにも、こうして魔力が宿ことがある。

魔力を得て巨大化した獣たちを、この世界では魔獣と呼ぶ。

おとなしいものもいるが、凶暴化した魔獣は人々に害をなすため、討伐対象となる。

主に魔獣討伐に駆り出されるのは、国王に忠誠を誓った騎士たちだ。

彼らはあらかじめ魔力が流し込まれた武器——魔法具を使って魔獣を倒す。

たいていはそれで片がつくのだが、稀に出現する巨大化した魔獣には歯が立たない。

そういうときには僕の出番がやつてくるわけだが、感謝の言葉は聞こえてこない。慣れてはいるが、悲しいものである。

「さて……今日の仕事はこれで終わりか」

濡れたローブを引きずりながら浜に戻ると、兵士たちが一斉に僕から距離を取つた。

こういう反応にもものはや慣れっこだ。……いや、慣れたと思いたいだけかもしれない。

人々から僕に向けられる視線は、どこからどう見ても好意的なものではない。

好奇心もあれば嫌悪もあり、恐怖もあり——彼らの視線は、小さな棘のようにちくちくと僕を刺す。昔はそういうたつ視線を浴びることが苦痛で常にフードをかぶっていたが、もうやめた。

僕は世のため人のためにこの力を使つてはいる。なのになぜ、僕がこそそしなくてはならないのかと開き直るに至つた結果、今は堂々と顔を晒して歩いている。

といっても、僕は皆に恐れ懼かれるような強面をしてはいるわけではない。

背丈は一七〇センチほどで、瘦身。足首までを覆うローブに身を包んでいたら、女性と見間違えられてしまいそうな体型だ。

僕に金髪碧眼の華やかな容姿がそなわっていたならば、ここまで人々から気味悪がられることはなかつたかもしれない。

だがあいにく僕は濡れたような黒髪で、瞳は淡い空色だ。

どちらかというと童顔に近い顔立ちをしていると思うのだが、表情をうまく作れない。そのせいで、さらに誤解を招きやすくなつてしまつていてる気がする。

砂浜で海水を吸つたローブをしぼつていると、騎乗の指揮官が近づいてきた。

どさりと目の前に落とされたのは、金貨の詰まつた布袋だ。

これが僕の働きへの対価である。

「用は済んだだろう。ほら、さつさとここから消えてくれ」

馬上から注がれる冷ややかな視線を受け止め、相手を見上げる。

ひとりわ立派な甲冑に身を包んだ男はびくつと怯んだように一瞬目を瞬き、目玉だけ動かして明後日のほうを向いた。

——たまには感謝されたいものだけど、仕方がないか……

思わぬ形で魔力に目覚めてしまった僕は、強制的に魔術師として国に仕えることになった。

だが、仕事を始めてからこっち、誰かに礼を言われたためしはない。

虚しいような寂しいような思いを抱えつつ、僕は無言で布袋を拾い上げた。

「言われなくても消えるさ。まあ、困りごとがあればまた呼ぶといい」

返事はなく、指揮官はなおも硬い表情のまま僕の動向を窺つている。

ここはせめて愛想笑いのひとつでも浮かべておくかと思い、口の片端を無理やり吊り上げて——僕は微笑んだ。

すると指揮官は「ヒツ」と妙な声を上げて露骨に顔を強張らせ、馬とともに一、三歩後ずさる。

……どうやら愛想笑いは失敗したようだ。

気まずくなつた僕は無言でスッと笑顔を引っ込め、兵士たちを刺激しないようにゆっくりとその場を立ち去ろうとした。

すると、背後に群れていた兵士たちがさつと僕を避けて道を開けた。

いきなり目の前にできた道を通らないわけにもいかない。

気まずさを抱えたまま、僕はあえて堂々とした足取りで、大勢の視線を一身に浴びながら馬車のほうへと歩を進めた。

防波堤近くに停められた一台の馬車に乗り込もうとしたそのとき、建物の陰からことのなりゆきを見守っていたらしい街の人々の視線に気がついた。

兵士たちと同様、僕を見る彼らの目にはさまざまな表情が見え隠れしている。

だがひとりだけ、ふくよかな母親の陰から僕を見上げている小さな少年の瞳にだけは、憧れを含んだようなきらめきが見て取れた。

声は聞こえなくても「すごい！」と言いたげにキラキラしている少年の表情を見ていると、心が少しあたたまる。

今僕には、それだけで十分だ。

彼のおかげで、また数ヶ月は生き延びられる。

笑顔を返そうかどうか迷つていると——ぬつと僕の視界を遮つて、ふたりの兵士が目の前に立ち塞がつた。

草色の質素な兵服に身を包んだこの大柄な男たちは、僕の監視役だ。

そのうちのひとりが、有無を言わせぬ威圧的な眼差しとともにこう言つた。

「ノクト様、枷を早く」

「……はいはい、わかつてゐるよ」

急かされるままローブのポケットから銀色の腕輪ブレスレットを取り出し、手首に通す。

これは僕の魔力を抑制する枷カセだ。『封魔の腕輪ブレスレット』と呼ばれている。

魔力を封じる力を持つ特別な金属でつくられたもので、繊細な彫刻の施された美しい逸品だ。

これはもともと、罪を犯した魔術師を捕縛するときに使われていた。魔力をもつて抵抗することを防ぐためにと開発された魔法具である。

咎人とがびとを抑え込むためにつくられたものを、僕は日常的に装備するよう命ぜられている。

万が一、僕が魔力暴走を起こして御者や街の人々を傷つけてしまわないよう、任務のとき以外は必ず装着しておかねばならない。

馬車に乗り込むやいなや、どつとのしかかつてくる眠気に目を擦りながら、僕は小さな窓からのぞく景色を見るともなく眺めた。

第一章 突然の再会

ここは水の王国、エルシャルオン。

国土の南側には鮮やかな青い海が広がり、王宮の周囲には石造りの端正な街並みが広がっている。人々の移動や物資の輸送のために整備された水路のつくりも美しく、この風景を楽しむために他の人間がエルシャルオンを訪れるという。水に溢れたこの土地にはその加護も厚く、火や風、大地の魔力よりも多大な恩恵を受けている。

街のそここには白亜の石で造られた噴水があり、噴き上がる水が芸術的な軌跡を描く。

夜になると、噴水を囲む魔法石が青や緑の光を淡く放ち、水面みなくもに揺れる光がまるで星空のように街を彩る。とても洗練された街だ。

僕の住まいは、街並みの洒脱しゃだつさで有名な城下町からずつと離れた寂しい山間やまとにある。

国からあてがわれた古い木造の家は酷く狭いけれど、十年住み続けた僕の憩いの場所だ。小屋の前には広い畑があり、そこに菜園を作つて暮らしている。

魔獣討伐の依頼さえこなければ、とても静かな暮らしだ。

今日も任務を終えるやいなや、小屋へ連れ戻される。

馬車に並走していた監視役の兵士たちの視線を居心地悪く感じながら、僕は馬車を降りた。

「お疲れ様でした。ノクト様、今夜もおひとりで過ごされるので？」

「…………やれやれ、またか。」

懶懶無礼な口調で話しかけてくる兵士の顔をチラリと見やる。

案の定、ふたりの監視役は卑しげな笑みを浮かべながら、僕の全身を眺め回していた。

僕の強さを知らない者はいないため、彼らが僕に手を出してくることはない。

ただ、僕が任務時以外で魔力を使えば厳罰に処されるということも、彼らはよく知っている。

その規制のせいで何を言われても僕が無抵抗だとよく知る彼らは、言葉で僕をからかうのだ。

まあ、こんな辺鄙な場所で僕の見張り役だ。暇なのはわかるが、つくづく鬱陶しいな……

僕はため息をつき、「ああ。それがどうした」と短く答えた。

「ひとりの夜はお暇でしょう？ 何をして過ごされるんです？」

「このあいだも、色っぽい声が聞こえてきましたよねえ。ひとりでどんなお楽しみを？ よろしければ、俺たちが見ていて差し上げましょうか？」

監視兵たちが、いよいよ面倒なことを言いはじめた。

僕は内心舌打ちをして、じろりと男たちを睨めつける。

だが彼らは怯えるどころか「おっ、こっち見た！」「せつかく可愛い顔してんのに、もつたいねえよなあ」と好奇に目を輝かせ、さらに卑しげな笑みを浮かべるのだ。

——不愉快だな。他に楽しみはないのか、こいつらは……

文句のひとつでも言ひ返せたらいいようなものだが、僕を踏み壓するような男たちの視線を浴びると、否応なしに過去の屈辱を思い出してしまう。

そのせいで何も言ひ返せず、余計に悔しさが募つた。

——だめだだめだ、こんな奴らのことなんて気にするな。心を乱すと、魔力暴走を起こしてしま

う……

「…………うるさい、黙れ。僕に構うな」

それだけを喉の奥から絞り出すように吐き捨てるど、僕は小屋の中へ転がり込み、背中でバタンと扉を閉めた。しつかり錠を下ろすことも忘れない。

監視兵たちが僕の声を聞いて何を誤解しているのか知らないが、あれは喘ぎ声ではなく呻き声だ。

この肉体には不相応なほど豊富にある魔力量のせいで、力を使うたびに古傷が酷く痛むのだ。

魔力を封じる腕輪の力を借りて魔力を自由に操れるようになつたものの、この痛みだけは消える気配がない。

しかも、歳を取ることに悪化している。

そして今日の任務でも、かなりの魔力を使つた。

じくじく、じくじく……痛みの気配が近づいているせいで余計気が立つてしまい、ねばつこい視線を僕に投げつけてくる男たちに憎しみさえ感じてしまう。

重たい身体を引きずつて暖炉に火を起すと、任務のときに着るように与えられた軍服とローブを脱ぎ捨てた。

下穿き一枚になつて橙色の炎が揺らめく暖炉の前で膝を立て、両腕で身体を抱きしめる。

そして、鎖骨から胸へと刻まれた四本の大きな傷跡を指先でなぞる。

十五歳の頃、僕は魔獣に襲われた。

それが魔力覚醒のきっかけだつた。

エルシャルオンでは、魔力が覚醒した者はすぐに王宮に召されることになっている。

そして王都で教育と訓練を受け、国家に仕える魔術師として働くなければならないのだ。

魔術師になど、僕はなりたくなかった。

けれど、魔力を持つ者は魔術師となり、王家に仕える以外の選択肢はない。従わざるを得なかつた。

もし僕が普通の魔術師だつたなら、それはそれで幸せだつたかもしれない。

この国では、魔力を持つ者は『神の祝福を受けし者』として大事にされる。

高い身分を与えられ、国じゅうの民から敬われる存在となる。

せめて、僕もそつちだつたなら……魔術師として生きる日々に、こうもうんざりはしなかつたかもしれない。

いくら苦しくても、この力を使うことで誰かが喜んでくれ、僕を褒めて認めてくれるなら、きつに殺しにされている。

「はあ……、う……つ……」

少しづつ、痛みの波が迫つてくる。

僕は慌てて立ち上がり、壁に造りつけた薬棚に手を伸ばした。

木棚に並んでいるのは、茶色い小瓶に入った鎮痛薬だ。庭で育てている薬草から自ら調合した水薬である。

ひんやりした小瓶を握り締めると、少しだけホツとする。

頬れるように暖炉の前に座り込み、僕は水薬を一気にあおつた。

馴染んだ苦味が口の中に広がり、喉を滑り落ちてゆく。

これを飲んだから痛みがこないというわけではない。

ただ、少し痛みを軽くすることができるだけだ。

薬を飲まずに放置すれば痛みのあまり悲鳴を上げて、この狭い小屋の中をのたうち回らなくては

60

ならない。

痛みで自我を失えば魔力暴走を起こす可能性があるが、任務のとき以外に魔力を使えば厳しい罰が待っている。

かといって、僕を看病する者はいない。

お偉方の一部は僕の力をもつと有効活用したいと考えているようだが、さつさと僕を消してしまいたいと考えている人々のほうが多数なのだろう。

『封魔の腕輪』^{ブレスレット}の着脱が僕の裁量に任されていることをずっと疑問に思っていたけれど、今はその理由がよくわかる。

彼らは、僕を死刑にする理由をつくりたくてたまらないのだ。

僕が魔力暴走を起こして只人ただひとを傷つけたり、兵士のからかいに怒りを爆発させて攻撃を仕掛けるような行為をしてくれたなら、僕を処刑する理由ができる。

僕を消すための大義名分が生まれるというわけだ。

だがわざわざそんなことをしなくても、この禍々しい水属性の魔力に肉体がもたず、そのうち僕は死んでしまうだろう。

たつたひとりで、孤独の中で僕は死ぬ。

それは決定した未来だ。それがいつになるのかはわからないけれど、そう遠い未来ではないとう予感はある。

そうなる前に、会いたい人がいる。

とはいえ、その願いが叶うはずもない。任務のときだけこの小屋を離れることが許される僕には自由がなく、会いたいに人に会いにいくことさえ叶わない。

——セス……

血に濡れた僕の手を握る少年の顔を、まぶたの裏に想い描く。

愛らしい顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らし、嗚咽おえつしながら助けを呼ぶ少年の姿を。

セスは五つ歳下で、孤児院でともに育つた。

僕にとって、本物の弟のように大切な存在だった。

幼かつたあの日、薬草摘みに出かけた僕らは魔獣に襲われた。

そしてそのときには、僕は魔力に目覚めたのだ。

幼いセスを——大切な存在を守ろうとしたそのとき、僕の中に眠る力の種が萌芽ほつがし、爆ぜたのだ。

「……う……はあ、はあつ……」

この力に目覚めてから十年。

あの日以来、セスとは会えていない。

「大丈夫だよ、セス。僕は平気だ……こんな傷、薬を飲めばすぐに治るからね……」

そこにはいられないセスの姿を思い描きながら、僕は掠れた声でそう呟く。

孤独と痛みに震える日々を、僕はこうして乗り越えてきた。

懐かしい表情を記憶の中から呼び起こし、僕の手を握るセスの姿を夢想する。

くるりとした大きな目は、色鮮やかな翡翠色だつた。

太陽や蠟燭の光を受けてセスの瞳がきらめくたびに、書物でしか見たことのない宝石を手に入れたような気分になつた。

二十歳になつたセスは今もきっと、キラキラと輝く綺麗な目をしているに違いない。

両目をふちどる長いまつ毛も、耳の下で切り揃えた柔らかい髪の毛も、けぶるような金色だつた。

セスが身動きするたびにセスの周りの空気がキラキラと輝き、彼がそこにいるだけで僕の毎日は明るくなつた。毎日が楽しめた。

活発で負けん気が強く、でも思いやりがあつて優しいセス。

彼が今ここにいて僕の手を握つていてくれたなら、こんな傷の痛みなどあつという間に消えてしまうのに……

「うつ……く……はあ、はあつ……」

だんだん座つてることさえつらくなり、倒れ込むように絨毯の上に横たわる。

裸体をちくちくと刺す硬い絨毯の感触はお世辞にも心地よいとは言えないが、もはやベッドに這はい上がることさえ億劫だつた。

ゆつくりと薪を舐めるように大きくなつてゆく炎が、僕の真っ白い肌を赤く照らしている。

重たいまぶたを薄く開いて赤々と燃える暖炉を見つめながら、僕は絨毯の上で胎児のように丸く

なつた。

痛い。

全身がじくじくと疼く。拍動に合わせて少しづつ痛みが激しくなり、僕はさらに小さく身体を丸めて目を閉じた。

魔獸の歯牙で怪我をしてから十年が過ぎた。

それほど長い時間が経つていて、この痛みはまるで癒える気配がない。

小さく縮こまつたまま、僕は左胸の傷を手のひらで強く押さえた。

薄い筋肉に覆われた胸元に、赤く盛り上がつた筋状の傷が四本。

それは、鎖骨から鳩尾のあたりまで長く伸びている。

いまだ生々しくつきりと浮かび上がつた傷は、白い肌の上にあつて酷く醜く、禍々しい。

そして魔力を使つたあとは、傷自体が拍動するかのように痛みを帯び、毎回僕を苛むのだった。

――会いたいなあ……。セスはどうして。どんな大人になつているだろう……。セスの存在が唯一の希望だ。

寒い、痛い、苦しい、つらい。

だけど、僕の手を握つてくれる者は誰もいない。

むなしく伸ばした白い指先のむこうに、橙色の炎が燃えている。

毛布を引っ張つて身体に巻きつけると、僕は記憶の中のぬくもりを想いながら目を閉じる。

感触を伴わない炎のぬくもりを抱きしめながら、四肢を縮めてひとりで眠った。



小屋に戻り、痛みに耐えながら眼ること数日。自作した鎮痛薬を飲んでこんこんと眠り、ようやく起き上がることができるようになったかと思つたら、王宮への呼び出しを受けた。

——つたく……病み上がりだというのに人づかいの荒い……
王都中央に鎮座する高台、その上に建つエルシャルオンの王宮は、陽光を浴びてひときわまばゆく輝いていた。

壁面は白く、その上には丸みを帯びた青い屋根が美しい。
噴水と水路で飾られた街並みの中心に佇む白亜の王宮の壯麗さもまた、王都の見どころのひとつだ。

ただ、天気がいい日の王宮はあまりにも眩しい。眩しそう。

壁も床も白いため、これでもかといわんばかりに太陽の光を反射するのだ。

普段薄暗い小屋で暮らしているせいで、まともに目を開けていられない。

切れ長の目をもつと細くしながら魔術師のイトリーやの後ろを歩きつつ目を擦つていると、どんどん

何かにぶつかつた。

「おっ、おい！ そんなに近づくな！ もつと距離を空けて歩け!!」

「ああ……はいはい、ごめんごめん」

「まつたく！ 気をつけろよなっ！」

僕にぶつかれたイトリーは大仰なほどに飛び上がり、サッと僕から距離を取つた。そして、いまいましげな顔で睨みつけてくる。

そもそもばかずの散つた頬を真っ赤にしつつ顔を歪め、僕に触れたローブをこれ見よがしにさつさと叩きながら、だ。

そういう嫌味つたらしい仕草に苛立つが、僕は無言でイトリーの後頭部を睨みつけるにとどめた。その気になれば、腕輪をしていてもイトリーの後頭部に小さなつららをぶつけることなど造作もない。だが、そんなことをしたら処刑されてしまうのでやめておく。

イトリーは僕と同じ二十五歳で、水属性の魔術師——いわゆる“水の魔術師”だ。

エルシャルオンに生まれる魔術師は、皆が例外なく水属性の魔力を帯びている。

水の動きを操れるため、治水工事の補助にあたつたり、水の出ない国に水を運んだり、王宮で祝い事があるときは水を噴き上げて場に華を添えたりする。
いかに高く、いかに美しい軌跡で水を噴き上げられるかで能力の優劣が決まるらしい。
平和なものだなど、僕はそれをいつも少し生ぬるく思つていた。

ちなみにイトリーの両親は漁師だ。

幼い頃に魔力に目覚めたイトリーは王宮に召され、両親には国からたくさんの金が渡された。彼の両親にとつては自慢の孝行息子だろう。

“水の魔術師”として国に仕えるイトリーは僕と違つて里帰りもできるし、王族に次ぐ高い地位をも与えられている。

だから、大きな問題を起こさない限り人生は安泰だ。——不公平すぎて悲しくなつてくる。

一方僕のような氷属性の魔術師は、数百年に一度、ここエルシャルオンに突如として現れる稀有な存在である。

ただただ氷属性の魔術師というだけならば、おそらくここまで嫌われはしなかつただろう。問題なのは、これまでに出現した“水の魔術師”たちが、もれなく王国に厄災を招いてきたということだ。

残つている記録によれば、初めに“水の魔術師”が出現したのは三百年前。

当時、この世は大戦の只中だった。

そのときばかりは押し寄せる敵を撃退する武力として“水の魔術師”は重宝されたようだが、そ

のやり口があまりに酷かつた。

攻め込んだ国を氷漬けにするだけでは飽き足らず、エルシャルオン国内に攻めてきた敵兵を全員凍らせ、亡骸を各国に送り返すという鬼畜ぶりを見せたなどいのだ。

国内にいる魔術師たちとも力量差がありすぎて、彼を諫めることができる者が誰ひとりいなかつたことも仇となつた。

結果的にエルシャルオンは他国から莫大な反感を買い、数十年にわたりこの国を孤立させたといふ……。

そしてその次に“水の魔術師”が出現したのは、今から百二十年ほど前のこと。

当時の“水の魔術師”は感情的になりやすいいちで、魔力操作が不得手だつたらしい。

情緒不安定で、すぐにカツとなりやすい性格だったその魔術師は、些細なことで魔力暴走を起こしていた。

その結果、常に温暖な気候が売りのエルシャルオンを国ごと寒冷化させて産業に大打撃を与える、その咎を与えようとした王族をはじめ、彼を捕らえようと追つてきた騎士を数十人近く凍死させ、後に肅清を受けた……。

そして今代。

“水の魔術師”として能力を開花させてしまったのが、この僕だ。

現在、世界は各国のバランスが保たれ、泰平といつていい時代になつてている。

ほんの二十数年前——僕が生まれたばかりの頃は各国の領土争いが激化していく不穏な空気が絶え間なく流れたが、その争いはすでに完結を迎えている。平和になつた今になつて僕という危険人物が爆誕してしまい、国としても僕の扱いに困つて

のが現状だ。『生まれる時代を間違えたな』と言われたことは一度や二度ではない。

とはいえ、僕だって人と争うのは好きじゃない、むしろ大嫌いだ。

二十数年前の戦争で家族を失った僕にとって、人と人の争いは最も忌むべきもの。

世界に平和が保たれてる今、僕が戦う相手は同じ人間ではなく、魔獣たちだ。

魔獣から平和に暮らす人々を守るために、この力を使うことは厭わない。

たとえ、僕の苦しみに気づく人が誰ひとりとしていなかつたとしても。

この世界のどこかで暮らすセスを遠くから守っていると思えば――……この孤独にも、耐えていける気がする。

「で、次はどんな任務なんだ？ 僕が行かないと片付かないような難易度の高い任務なのか？」

「知らないね。僕はお前を連れてこいつて言われてるだけだ」

「ふうん。ま、君たちの水遊び魔法程度じゃ、魔獣の一匹も討伐できないもんな。おかげで僕は儲かるよ」

「な、なんだと!?」

つい嫌味っぽい口調になつてしまつた僕に向かって、イトリーがいきりたつ。

だが僕に向き直るや否や、イトリーの奥二重の小さな瞳が怯えたように震えたのがわかつた。

もうひとつ僕にとって不幸だったのは、現在エルシャルオンに数百人存在する“水の魔術師”たちと比べて、僕の魔力が恐ろしく強力だということだ。

また、彼らとは比べ物にならないほど魔力量も豊富である。もし僕に宿つた氷属性の魔力が些_さまつなものならば、こんな扱いを受けなかつたかもしれない。

何十年前、戦時の魔術師たちは、“水の都”として作られた街の構造をうまく活用して水の障壁をつくりあげ、王宮を敵から守つたそうだ。

激しい濁流をつくりあげて攻め寄る敵を押し流すなど、豪快な活躍をしていたという。

だが戦争が終わり、世界に平和が訪れた今、若い“水の魔術師”たちは一気に弱体化した。

そのわりに今も高い身分が与えられているのは、戦時のなごりがあるためだ。

中でも特にすぐれた魔術師たちは“近衛魔術師”と呼ばれ、王族らのよき相談相手となつてゐる。

王族との距離が近すぎて一部の貴族たちからは煙たがられているという噂も聞こえてくるが――まあ、それは僕に関係のない話である。

「ほら、ここで待つてろ。腕輪_{アームレス}、ちゃんとしてるだろうな」

「してるよ、ほら」

腕を持ち上げると、僕の手首で銀色の腕輪_{アームレス}が鈍く光る。

「ならない。じゃ、僕は行く。お前はここを動くなよ」

イトリーは丸い身体をふんぞり返して僕を見下ろし、ぱいっとそのまま行つてしまつた。

魔獣討伐を主に担う王宮騎士団や、騎士団の下で戦闘任務などに就く兵たちの訓練場からほど近

い場所である。

僕の背丈よりも高い木々が丸く綺麗に剪定され、白亜のタイルが敷き詰められた小さな水路と噴水が整然と並んでいる。

目線の先には東屋がある。

白い屋根が陽光でまばゆく輝いていた。

——綺麗な庭だ。きっとあの東屋で打ち合わせをするんだろうな。

任務の大きさによつて説明にやつてくる役人の階級はさまざまだが、皆びくびくしながら僕の様子を窺つてくるところは共通している。正直やりづらいが仕方がない。

東屋の椅子に腰掛けて役人を待とうと思い、僕はかぶりっぱなしでフードを上げてゆっくりと小径を歩いた。

ひと気がなく静かな場所だ。さんさんと暖かな陽が差し込む庭園に居心地の良さを感じていたのだが——ふと、庭木の陰からぞろりと現れた数人の兵士の姿を目の当たりにして、僕は内心舌打ちをした。

「おっ、これはこれは。ノクト様じゃないですか」

僕の小屋を見張る監視兵のひとりが、三人の仲間を連れてふらりと現れた。

訓練を終えたばかりなのだろう。質素な訓練着に包まれた筋肉質な身体には汗が浮かんでいる。

——くそ、面倒だな。役人がすぐに来てくれたら、こいつらに絡まれなくてすんだのに……

しかし庭園の入り口のほうを見やるも、人がやつてくる気配はない。

イトリーと違い、男たちは怯む様子もなくすかずかと僕に近づいてくる。監視兵の男は、僕がおとなしいことをよく知っているからだろう。

気づけば僕は、頑強な一般兵に取り囲まれてしまつていた。

ぞわ、と全身の肌が一斉に粟立つ。

——落ち着け、大丈夫だ。動搖するな。……こいつらは僕に手を出せないんだ。

「へえ……こいつがそう？ 近くで見るのははじめてだ。けつこう可愛い顔してんじやねえか」

見慣れない男のひとりが、わざわざ身を屈めて僕の顔を覗き込んできた。

唐突に距離を詰められ冷や汗が一筋背中を伝うが、僕はふいと視線を逸らして人知れず息を殺す。

僕がうつむいている間も、まわりでは男たちが僕を眺め回しながら、浮かれたように言葉を交わしている。

「へへ、そーなんだよ、可愛い顔していらっしゃるだろ？ 見張りしてるとさ、小屋から夜な夜な色っぽい声が聞こえてくんだよな」

「へえ、そうなんですか。ノクト様、いつたいひとりで何をしてらっしゃるので？」

「ずっとおひとりじや寂しいでしょ？ ……どうですか、今度俺がお相手しますよ？」

「バカかお前。ノクト様に妙なことしたら水漬けにされちまうぞ！」

男たちはそう言つて、がははと可笑しげに笑つている。

僕の力を恐れて触れてこようとはしないが、下品な揶揄を浴びるたびに身が竦む。

……正直言つて、怖いのだ。

こういう手合いの男たちが纏う空氣によつて、忌まわしい記憶が呼び起こされそうになる。

魔術訓練生時代——魔獸に襲われた後、十五歳で王宮に召されたばかりの頃、僕は一度だけ大問題を起こしたことがあつた。

怪我で意識を失つているうちに孤児院から王宮へ連れてこられていたこともあり、僕は酷く混乱していた。

厳重な警戒のもとで治療を受け、身体が動くようになるやいなや、厳しい魔術操作の訓練を課せられた。

孤児院でのこぢんまりとした穏やかな暮らしから強制的に引き離され、見ず知らずの大勢の大人たちに囲まれての訓練生活を強いられた。

その上その大人たちは皆、いつ爆発するかもしれない爆弾を扱うかのように僕に接する。突然ガラリと環境が変わつたことへのストレスと我慢が積もりに積もつて、僕は一度だけ酷い魔力暴走を起こしてしまつたのだった。

きつかけは些細なことだつたと思う。

家柄が良く年齢の近い魔術訓練生に、孤児であること笑われた。

僕に関してだけなら何を言われても平氣だ。でもその訓練生は、僕が家族のように思つていた孤児仲間たち全員を貶めるような発言をした。

その頃はまだ魔力をコントロールするすべが身についていなかつた。

怒りによつて爆発的に魔力は増幅され、封魔の腕輪は碎け散り——大惨事が起きた。

だが僕は魔力に呑まれてしまつて、その瞬間をはつきりとは覚えていない。

ただ記憶にあるのは、魔術訓練生たちの阿鼻叫喚と恐怖の眼差し。

あとから地下牢で聞かされた話によれば、僕は訓練用広場の地下深くに流れる水脈の水をすべて凍らせ、それを地表に呼び寄せて地面を突き破らせたということだつた。

幸い怪我人はいなかつたけれど、広場は無惨な有様だつた。

青々とした芝が敷かれて綺麗に整えられていた地面には、小山のような水塊^{ひょうか}がいくつも突き出していたという。

それはまるで僕の攻撃性を具現化したように鋭く尖つていたらしい。

氷が溶けて消えたあとも、地面は深い亀裂が入つたり隆起したりとぐちやぐちやに荒れ果てたまま。地下水脈を破壊したせいで、延々と水が噴き出している場所もあつたといふ。

そのせいで王宮内にまで泥水がひたひたと侵入し、魔術師仲間のみならず、僕は王族や騎士たちからもひんしゆくを買つてしまつた。

その尻拭いをしたのが、‘水の魔術師’たちだつた。

総出で水を止め、水脈の修復にあたり、現状復帰にかかつた期間は三か月。國中でこの一件の噂で持ち切りとなり、僕はエルシャルオンの有名人になつた。

ただし、広がつたのは悪名のほうで……

そう、僕が嫌われる理由は、過去の“氷の魔術師”たちのせいだけじゃない。

こんな事件を起こしているから、皆が僕を避けるのだ。

僕が皆でも僕を避けたい。怒らせたら何をしてかすかわからない危険人物に、率先して近づきたいわけがない。

そしてこの事件のあと、僕は魔力を封じる“封魔石”で作られた手枷と足枷で四肢を囚われ、気絶するまで激しく鞭打むちたれた。

ただでさえ魔力を放出したあとは傷の痛みに苦しまねばならないのに、そこへさらなる激痛が叩きつけられる。

思い出すだけで吐き気がするほど、最悪な時間だった。

粗末な木の台の上に俯せうつぶに寝かされ、拘束され、三人の処刑人が代わる代わる僕を鞭打むちつ。

剥き出しにされた僕の背中に向かって鞭むちをしならせる男たちの顔には恍惚こうこつとした興奮が浮かび、下卑むなた言葉や笑いを浴びせられるたびに心がすくんだ。

痛みよりも処刑人たちの卑しい視線に晒さらされることが、何よりも屈辱くじくだった。

激痛に耐えきれず涙を流し、許しを乞う僕に嗜虐心しそくじんをくすぐられたのか、はたまた劣情を刺激されたのか、処刑人たちの股座またくらは大きく膨れ上がつていたのだ。

いつ終わるのかもわからない苦痛。

背中は熱く燃え上あがるように痛むのに気を失うこともできない。

どうしてこんな目に遭っているのだろうかと、自分の人生を僕は呪つた。

ただ、罰の効果は抜群だった。

その日以降、僕は何があつても魔力暴走を起こすまいと心に誓い、魔力制御の修行にこれまで以上に精を出した。ふたたびあんな目に遭うのはまつびらごめんだ。

あのときは、処刑人とともに監視役の近衛魔術師がいたから最悪の事態は免れたが、もしまだ処刑人たちに囲まれるようなことがあつたとしたら、おぞましい行為を強いられてしまうかもしれない……その恐怖が、僕の行動を慎重にさせるのだ。

今、僕を囲んでいる兵士たちが纏まつう粗野な雰囲気。これは、あのときの処刑人たちを否応いやおうなしに思い出させる。

魔力を使えばたやすく退けられる相手だが、そうすると僕は極刑を科せられる。

それそこいつらは知つていてる。だから僕をからかって、反応を見て遊んでいる。

……腹が立つてたまらないのに、どうしようもなくこの手の男たちが恐ろしい。

それが悔しくてたまらなかつた。

「あれ？ ノクト様、顔色がお悪いですよ？」

「ははっ、仔ウサギみたく震えてんじやねえか。こいつ本当に強いのか？」

「ばーか、触つたら凍つちまうぞ！」

「本当かよ。どれどれ、ちよつと試してみるかあ？」

ひとりわ大柄な男の太い腕が眼前に迫り、視界が氷結するように白く霞んだ。恐怖と嫌悪がないまぜになり、身の危険を感じて防衛本能が燃え上がる。

こうなつてしまつたときが一番あぶない。

魔力が溢れる。

「つ……いけない、制御が……!!

溢れ出しそうになる力の濁流をなんとか抑え込もうとぎゅつと目を閉じたとき——ふわ、と清々しい草原のような香りが、僕の鼻腔を淡くすぐつた。

「この無礼者どもが。ノクト様から離れる」

「つ……」

陽光を吸つて蕩めく金色が、見上げた視界の中でまばゆく輝く。

背の高い男が、僕に向かつて伸ばされた太い手首を掴んでいた。

そして、端整な横顔に厳しい表情を浮かべ、兵たちを睨みつけている。

一般兵とは違ひ華やかな装束を身に纏つた若い男を見て、兵たちが揃つてぎよつとしたような顔になる。

「つ……い、いえ俺たちはただ！ ノクト様の体調が悪そだつたから手を……！」

「嘘をつけ。——汚らわしい」

金髪の男は問答無用とばかりに、兵士の腕をそのまま背中のほうへ捻りあげた。

悲鳴を上げながら地面に膝をついた兵士が、「すみません、すみません……つ！！ 放して、折れる……つ！！」と脂汗を流しながら苦悶を滲ませている。

だが、金髪の男は冷ややかな目つきで兵士を睥睨したままだ。

周りの兵士たちも、男の凄みに負けて尻込みしているようだつた。

「お、折れる、折れるつ……!! やめてください、もう、しませんから……!!」

「しない？ 何をだ」

「ノ、ノクト様に……無礼な態度をとつたこと、謝ります、ので……つ……もう放してください……」

「謝罪だけじゃ足りないな。もう二度とノクト様に近づかないと誓え」

「誓います、誓いますから……やめてくださいつ……!!」

「信用できないな」

片手一本で屈強な兵士を屈服させている男は、ぱつと見たところ兵士よりもずっと細身のようだ。だが、押さえるべき急所を掴んだ長い指にこめられた力は容赦がなく、ミシミシと骨が軋む音が僕にまで聞こえてきた。

しかも男の横顔はまるで無表情なままだ。放つておくと何をしでかすかわからない不気味さがあり、思わず僕は声を上げていた。

「お、おい……!! もういい!! 放してやれ!!」

咄嗟に声を上げて金髪の男を制すると、翡翠色にきらめく双眸がまっすぐに僕を捉えた。

——え……？

目があつた瞬間、ドクン……と心臓が跳ね上がる。

その男の瞳の色、髪の色、そして端整な顔立ちが、僕の記憶を大きく揺さぶった。

「……ノクト様がそうおつしやるのなら」

兵士たちに向けていた冷酷な目つきが嘘のように、男は砂糖菓子のように甘い笑顔を僕に向かえた。その豹変ぶりに少しばかりゾッとする。

男はぱつと兵士の腕から手を離し、僕に見せた笑顔を兵士たちに向けて凄みのある低音の声でこう言つた。

「消えろ。後から沙汰が下る。覚悟して待つように」

「つ……失礼します……!!」

腕を折られかけた仲間に肩を貸しながら、兵士たちがバタバタと忙しく消えていく。

すこぶる顔のいい男とふたり、その場に取り残され、僕は恐々とその立ち姿を見つめた。

すらりと立つ姿勢の良さから滲み出るのは、育ちの良さそうな上品な空氣だ。

平民出の兵士たちから感じる粗野な雰囲気はまつたくなく、身のこなしには隙がない。

一般的の兵士たちは草色のズボンとシャツの上に鎖を編んだベストを身につけているのに対し、彼が身に纏っているのは、淡い灰色の詰襟に金色の飾緒のついた軍服だった。

高い襟の縁や袖口には金糸で縫いつけられた飾り。胸元には同じく金色の飾緒。

——この華やかな衣装は、王宮騎士団か……

不意に、金髪の騎士が僕に向き直る。

思わず後ずさった僕に、その男はふわりと柔らかな笑みを浮かべた。

「ノクト様はいかわらず、とてもお優しいのですね。あなたが止めてくださいなかつたら、あのまま腕を折ってしまうところでした」

「な、なんてことを言うんだ。まあ、間に入ってくれたことには礼を言うが……」

「あの男、数か月前からノクト様のご自宅の見張りに立っていた兵ですね。以前からあなたにあんな調子で？」

「……いや、それは……」

下卑た言葉でからかわれていたこと、それに対して何も言い返せずにいたことを知られるのが恥ずかしくて口籠る。

すると騎士は沈黙からすべてを察したようにひとつ頷き、「なるほど」とだけ口にした。

「ノクト様が彼らに手を出せないと知つていて調子に乗つたのですね。許しがたいことです」

「い、いや、でも……」

あんなやつら、はじめに声をかけられたときに僕がもつとうまくあしらえていたら調子づかせることはなかつたはずだ——と、思うところはあるが、うまく言えずにまた口籠る。

すると金髪の騎士は俯いた僕の前にすっと跪き、自らの胸に手を当てた。

澄み渡るよう美しい翡翠色の瞳が、まっすぐに僕を捉えている。

ひたむきで熱い視線だ。どうしてそんな目で僕を見るのかとたじろいでいる、金髪の騎士は囁くような声でこう言つた。

「ノクト様のことは私がお守りします。どうか、そんなお顔をなさらないで」「……えつ？ な、何をいきなり……！」

「ようやく、ようやくお会いできたんです。これからはもう、あんな下品な男たちをあなたのそばには近づけない。これからは、私がずっとそばでお支えします」

「……は……？」

それこそ神に祝福されたかのような美しい騎士が、潤んだ瞳で僕を熱く見つめながらそんなことを訴えてくる……

僕は混乱した。混乱するなと言ふほうがどうかしている。触らぬ神になんとやらだ。

なんだかじわじわ怖くなつてしまつた僕は、「いや……大丈夫だ。僕に構わないでくれ」とだけ告げて、さつさとその場から離れようとした。

だが……

「ノクト様。……私を覚えてはおられませんか？」

「え？」

「私の名はセス・ヴィラス・リストアード。幼い頃、あなたは私の命を救つてくれた」「つ……」

その名前を聞いた瞬間、心の奥底に大切に閉じ込めていた遠い記憶が強く揺さぶられた。ばくばく、ばくばくと心臓が暴れはじめる。

けぶる金色の髪、瞳の色、この顔立ち――……。

幼い頃に離れ離れになつた幼いセスの顔と若い騎士の顔が、目の前でだぶつて、重なつた。

「セ……セス、なのか……!?」

「ああ、そうだよ。俺だよ、ノクト」

「う、うわ……」

立ち上がりセスは目を細め、蕩けるように甘い笑みを浮かべた。

すつかり背が伸びている。僕より二十センチは背丈がありそうだ。

肩幅も広くなり、胸板も厚い。

華やかな軍服がよく映える逞しい体つきになつた。

あまりに立派に成長したセスが眩しく、僕はしばし呆然としてしまつた。

「そんな、まさか……こんなところで会えるなんて……」「よかつた。俺のこと、覚えててくれたんだね」

「当たり前だよ！ で、でも、こんなに立派になつてるのは思わなかつたから、誰だかわからなかつた……」

「ふふ、そう？ 立派になれたかな、俺」

目を細めて微笑むセスの姿がなぜだかすこぶる誇らしく、目が離せない。

——まさか王宮騎士団に入つていたなんて。こんなに近くにいたなんて……！

突然すぎる再会に胸のざわめきが収まらない。

僕はおずおずと手を伸ばし、指先でセスの頬に触れてみた。

幼い頃はふにふにだつた柔らかい頬はシャープになり、小さく丸っこかつた鼻はすつきりと鼻筋が通つている。

今も綺麗な二重まぶたの双眸^{そうぼう}には理知的な気品が宿り、騎士ではなく王子様といつても違和感がないほどに麗しい。

唇は幼い頃と変わらずほんのりと赤いままだが、下唇がふつくらとして柔らかそうだ。それが妙に色っぽく、僕は少しだけどきりとした。

その唇が滑らかに動き、僕にだけ聞こえる声で秘めやかに囁いた^{ささやか}。

「会いたかったよ、ノクト。すごく会いたかった」

「ぼ、僕も……！ 僕も会いたかった。ずっと、セスがどうしてるか気になつてたよ」

「本当？ 嬉しいな。ここまで努力してきた甲斐があつたよ」

——ああ、セスだ。間違いない。大人になつたセスが、僕の目の前に……!!

ようやく実感が湧いてきた。

懐かしさと喜びで胸が高鳴り、目の奥がじんと熱くなる。

胸の奥から噴水のように溢れ出す感情をどうすることもできずに僕は思わず、倒れ込むようにセスの身体に抱きついた。

「あつ……。ノ、ノクト？」

「セス。ああ、セス……嬉しいよ。またこうして会えるなんて……！」

昔は僕がセスを受け止めていたけれど、今はすつかり立場が逆になつてしまつた。

僕を受け止めるセスの胸は逞^{たくま}しく、そつと僕の肩に置かれたセスの手はとても大きい。僕の肩をすっぽり包み込んでしまえるほどになつていて。

ドキドキしているのは僕だけではないようだ。

きらびやかな飾りのついた軍服の中でばくばくと暴れている心臓の音が聞こえてくる。それさえも懐かしくて愛おしくて涙が滲む。

——セスも僕との再会を喜んでくれてるみたいだ。ああ……どうしよう。嬉しいすぎて、胸が、苦しい……つ。

どくん、どくん、どくん……心拍数がこれまでにないほど上昇していく。

孤独な静けさに慣れた僕の心に久方ぶりに血が巡り、濁流のように感情が搖^か乱され、胸の奥を

ら熱いものがとめどなく噴き出すような感覚が僕を包み込んだそのとき——
ビキン!! と冷たく硬質な音があたりに響く。

同時にセスの身体がびくりと強張った。

「つ……!? 人、ノクトつ……!?」

「……あ、ああっ!?」

セスの背に回していく手から魔力

セスの背に回していた手から魔力が溢れ出し、ひづきあつた僕らの身体をひとまとめにして氷の中に閉じ込めてしまつてゐる。

突然出現した氷に上半身を囚われてしまつたこと驚いたうし

突然出現した氷に上半身を囚われてしまつたことに驚いたらしく、セスが「うわっ……！」と小さく声を上げた。

王宮内で魔法を使うな

三宮内で魔洋を倒せなどと言語道断 处罰対象になる行為が
すばざまを隠す二つ意識を集中 之が、敵へハカラキのせいか

それが余詰は僕を焦らせる

「つ、冷たい……本当に氷だ。すごいね、ノクト」

いや、感心してゐる場合ぢや……！」

セスを抱きしめたまま凍りついている自分の腕をなんとかしようともがきつつ、深呼吸して平静を取り戻そうと頑張っていると……顔のすぐそばで銀色の光がぎらりと閃く。

「これは、つを、いざう、うこでです？」王宮内で騎士を攻撃する二は

若い男の声が威圧的に響き渡る。

恐る恐る背後を向くと、燃えるような赤毛の男が、剥ぎ出しの殺意も隠さず僕を睨みつけていた。

彼の切れ長の双眸は、僕に向けた刃と同じくらい鋭くて、物騒で……怖い。

ま、待て！ 違う！ セスを攻撃するためにこんなことをしてゐるわけじやないんだ！」

「だから違うつて……！」

「落ち着きなさい、レナード」

すると今度は、もうひとつ落ち着いた男の声が聞こえてきた。

見上いると 四十歳前後らしい男が立っている
胸元にはたくさんの中章。

上がり眉とはつきりした二重まぶたが凜々しく、誠実そうな印象の男だ。僕を前にして怯む様子もなく、泰然としている。……が、青白い光を湛えた短剣を僕に突きつけ

て いるところは若い騎士と同じである。

年嵩の騎士は困惑丸出しの視線で僕を見つめたまま、静かな口調でこう言つた。

「ノクト様、まずは落ち着いてください。これは上からの命令なのです、あなたの魔力が暴走したときは取り押さえよと」

「ぼ、僕は落ち着いてる！だからその物騒なものを下げてくれ」

「まずはセスを離してやつてください。刃を下ろすのはそれからです」

「わ……わかった」

もう一度セスを見上げると、白い頬が薔薇色に染まっている。

いけない、身体を冷やしすぎて熱が出ているのかもしれない。

僕は慌てて、自らの手のひらに力を集めた。まずはこの氷を碎かなくては。

「セス、すまない。冷たいよな、すぐなんとかするから」

「う、ん……俺は丈夫だよ。もうちょっとこのままでも……」

「何を呑気なことを！　すぐ離れるから、ちょっと我慢してくれ！」

刃を向けられながら必死で氷を碎こうと頑張るが、気が散つてその作業は捗らなかつた。

にこにこ微笑みつつも、ときどき寒そうに震えるセスに抱きついて奮闘する僕を眺める騎士たちの視線は、氷に負けず劣らずとても冷たかつた。



「私はダリオン・ガウス・オーヴィン。今回の魔獸封印隊の隊長を務めさせていただきます」

「……僕はノクト・ロラ・シャルダンだ。どうぞよろしく」

「ぼそりと愛想なしにそう述べるも、年嵩の騎士、ダリオンは気を悪くするそぶりはない。

朗らかな口調で「よろしく。ではご説明いたします」と言い、明朗に微笑んだ。

ようやく氷を碎いたあと、僕は庭園の東屋で任務の説明を聞いた。

今回の任務の同行者は、王宮騎士団の彼らだという。

王宮騎士団は、国王を守護する近衛騎士団に次ぐエリート集団だ。

王族が外遊する際警備にあたつたり、危険度の高い魔獸が現れたときに派遣される部隊である。

彼らは、魔力の宿つた剣や弓矢を使って魔獸と戦う。

平民から募つた一般兵たちは触れることさえ許されない、高価かつ危険な武器を使うため、王宮

騎士団は特に厳しい訓練が課されている。

そうどうな武闘派集団だが、男爵家以上の子息しか王宮騎士団に所属できない。僕はそこに、少

しだけ引っ掛かりを覚えた。

僕と同じく孤兎だったセスが、どうやつて王宮騎士団に入れたのだろうか……

だが、ダリオンの説明を聞くうち、そんな懸念はあつという間に忘れ去つてしまつた。

立ち読みサンプル はここまで

「こ、国外!? エルシャルオンの外に出られるのか……!?」

「ええ。行き先は、同盟関係にあるアルナディア王国です」

「アルナディア……!!」

彼らが同行する次の任務は、魔獣の封印。

しかも胸が躍ることに、僕にとつてはじめての国外任務だ。

アルナディア王国はエルシャルオンより北にある小さな国。そこは険しい山々に囲まれた国土の三割が平地で、そこには近代的な街並みが築かれていると聞いたことがある。

機械産業がさかんで、さまざまな技術者が工房を構えて腕を振るつているらしい。

機械と光魔術を組み合わせた土産物が面白いことで有名で、かねてから一度訪れてみたいと夢想していた土地でもあつた。

アルナディア王国は通称『光の国』とも呼ばれ、光属性の魔力を持つ魔術師たちがたくさんいる。この国の夜を照らす魔法石は、すべてアルナディア王国から仕入れたものだ。

夜になると色とりどりの光に照らされて輝く噴水の仕掛けも、アルナディア王国の職人とエルシャルオンの魔術師たちが協働してつくりあげたものである。

僕は幽閉に近い状況で暮らすことを強いられているため、時折無性に新たな風景を見たくてたまらなくなる。自由に好きなところへ行きたくなる。

そんなことが許されるわけがないとわかつて、今回の国外任務には胸が躍つた。

「アルナディアは我が国とは比べ物にならないほど人口が少なく、軍事力が高くはありません。その代わりに高度な機械技術と魔法でつくりあげられたからくりが王宮を守っているそうですよ」

「そ、そんなものがあるのか!? すごいすぎる……!!」

城を守るからくりなんてものはエルシャルオンには存在しない。

どんな外観をしているのか、どれほどの大きさなのか、どのように動くのか、まるで想像もつかなかつた。

そもそも僕は他国を自由に行き来することなどできない立場だ。任務なんてとつと終えて、アルナディアの国の風景をじっくり見てまわりたいものである。

「面白そうだなあ。早く見てみたいね、セス」

「つ……ええ、そうですね」

ついわくわくしすぎて、隣に立つセスをパッと見上げた。

するとセスはやや驚いたように目を見張つたあと、花が咲くように微笑んだ。

その笑顔はあまりにも麗しいが、どことなく幼子をあやすような甘さが含まれていて、無邪気にはしゃぎすぎてしまつた自分が恥ずかしくなつた。

軽く咳払いをしてベンチに座り直し、僕は務めて冷静な声で「それで、今回の同行者があなた方、ということですか」と丁寧に問いかける。

「ええ。今回の任務は外交的な意味合いが強いので、我々王宮騎士団が同行いたします」